
凍結 0

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凍結0

【Nコード】

N4973W

【作者名】

朱鷺

【あらすじ】

始まりは、一通の手紙だった。

完全に密室された空間に10人の男女が二週間滞在する……。外の常識は一切通用しない。

それぞれが隠し持つ凶器と殺意。

生き残りを、自分の命を掛けたサバイバルゲーム……。

報酬は金と名誉と幸福と権利と家族……。

生き残る事は出来るのか・・・。

プロローグ 2

見えたのは、真っ青な空だった。黄色い太陽の光が降り注ぎ、青い若葉の間からは春を感じさせる黄色と赤の花々が咲き乱れている。

大きく息を吸い込む。

今まで感じた事のないくらいに清々しい匂いだった。

そう、全ては終わったのだ。

「凜君……君はこれからどうするつもり？」

俺はのんびりと空を見上げる。この14日間で起こった事は忘れられない……忘れてはいけない出来事だらけだった。生きた心地の全くない、又、今までの人生で一番生きた心地のする二週間……。

「そうですね……。」

俺は質問の主に目を向け、薄く笑みを作って

「今の時代にはアレですけど、旅でもしてみますか。」

と、冗談を言っていると相手は笑ってくれた。「冗談で言ってみたが旅も楽しいだろうな、などと思いながら再び空に目を向ける。

ぽっかり空に穴が開いた様に浮いている真っ白な雲を見上げ、

「でも・・・どんなになっても・・・何をすることになっても・・・。

」

視界の隅で相手が不思議そうな顔で、こちらを見るのが見えて俺も相手の顔を見る。お互い見つめ合う。そして俺はニコリと笑い

「俺は、俺の人生を楽しむつもりです。」

プロローグ2（後書き）

プロローグ2です。1は小説の最後に有ります。
設定がグダグダにならない様に精一杯頑張ります。

登場人物（前書き）

此処は読まなくても結構です。

一応、書いておきますが、本文内で改めて紹介します。

登場人物

和人 なぎと 凜 りん 18歳。

両親共に幼いころ死去。

叔母の家に引き取られて生活している。

報酬 真実

中川 なかがわ 静香 しずか

21歳。

職業株式会社の部長。

報酬 金

小向 こむかい 隆平 りゅうへい

30歳。

中川静香の元彼氏。

報酬 許し

藤堂 とうどう 和葉 かずは

18歳。

弁当屋のバイトとして働いている。
ミステリー作家の成田 権の大ファン。
報酬 正体

岸上 大介

20歳。

無職。

思い込みが激しい。

報酬 幸福

新田 絢にいた けん

25歳。

サラリーマン。

報酬 金

熊中 愛くまなか あい

27歳。

カフェのウェイトレス。

報酬 退屈からの脱出。

大庭 おおは
有巢 ありす

報酬 27歳。
治療

坂田 さかた
優 ゆう

報酬 26歳。
再会

渡部 わたべ
由希 ゆき

報酬 25歳
才能。

壱

確か、事の初めは昼過ぎだった。

軽く朝食を取った俺は、盗難された自転車の回収をしに最寄駅から三駅程の警察署まで歩いて行った。どうやら、盗んだヤツは泥酔していたト力。

警察署で必死に謝られたが「気にしていないので・・・」の一点張りを俺は主張し、『盗難自転車受取人』という事で書類の様な物に色々書かされた。と言っても、書いたのは『和人^{なまこ}凜^{りん}』という俺の名前と俺が十五歳で有る事、ついでにバイトをしている事も書いた。この年でバイトとは・・・。と怪訝な目で見られたが、「両親共に俺が小さい頃に死んで、俺は親戚の人に引き取られたのですが、あまり迷惑をかけたくないの・・・。」のような事を言い、警察の人達からは同情され、昼飯まで奢ってもらった。刑事ドラマの様にかつ井が出てくるのか・・・と内心期待していたが、現実とはつまらない物で出てきたのは『270円』と値札が付いているカップラーメンだった。・・・期待した俺が馬鹿だった。

帰り道、何となく本屋に寄り『注目 ミステリー小説家 成井^{なりい} 権^{ごん}』と書かれたスペースに入って行き、二三ページみた後「・・・つまんねえ。」と感想を言って立ち去った。・・・何か、睨まれているような気がするが気のせいだろう。

俺は、漫画の立ち読みが出来る所に早足で飛んでいき、隣で漫画を見ながら何かを言っている五月蠅い^{うるさい}20過ぎの男子にイラつとしながらも二時間近く滞在し、コンビニで弁当を買って「箸付けて下さい」と言っただのにも関わらず付けてくれなかった事にも苛立ちを感じ

じながら家へ帰った。

何時もの日常。

何時もと同じ風景。

全てが同じ。

何も変わらずに時が過ぎる。

・・・筈だった。

家の脇に自転車を止め、家へ入ろうとバックの中から鍵を探索していた時

「・・・和人 凜様ですね？」

反射的に振り向く。

黒いスーツを身にまとい、背筋の伸びた男がそこに立っていた。しかし、黒いスーツが良く似合う。黒いシルクハットの様な帽子からは白髪が有ったから、かなりの年齢の筈だが年を感じさせない様な男だった。

男は俺が怪訝そうにしている視線を感じたかどうかは分からないが、スーツの内ポケットの中から一枚の名刺を取り出すと、恭しく俺に手渡した。

俺も一応、バイトをしている。その時に名刺をもらう事は何回か有った。しかし、こんなに恭しく渡されたのは初めてだった。

俺はとりあえず、相手の目を見ながら一礼して名刺を受取と目を落とす。

『人間犯罪心理学病院院長 兼 警察庁 極悪犯罪者プロファイリング 担当 古出 守』

とコンピュータで書かれた字が語っていた。

・・・えつと。意味は良く分からないし、この状況もイマイチ理解できないが、これだけは分かる。

「・・・お偉い方・・・ですね・・・。」

とにかく、偉い。ドがつくほどの偉い人、と言うのは分かった。それだけは分かる。

俺は改めて名刺と睨めっこをしている内にとりあえず状況だけは理解出来た。

『犯罪者の心理をプロファイリング（調べる事）する事を仕事としている人が、俺の所へ来た。』・・・何故俺の所へ来る？俺は何か変な事を仕出かした記憶はないぞ？

「・・・で、何の御用なのでしょうか。」

不思議な敬語を使いながら、俺は必死に冷静を演じて言った。老人（古出 守さんだっけ？）はニコリと笑い、言い放った。

「貴方に、犯罪取り締まり班と凶悪犯罪プロファイリング社が合併

して行つ、とある『賭け』に参加していただきたいのです。」

・・・は？賭け？俺が間抜けな顔で老人を見つめると、老人は咳払いに似た声で、失礼、と言つてから

「言葉を間違えました。実験、と言つた方が正しいです。」

我が国の犯罪率は下がるところか悪化しています。勿論、警察や私たちは最善を尽くしておりますが、・・・悲しい事です、起こる事件全てを解決できるという未来には達成できないと考えております。」

・・・なるほど。それが今の警察と犯罪の関係つてヤツか。ま、『犯罪は一日に何件も起こる。しかし解決できる事件は限られている。』つてヤツだな。

「それで、私達は予めこの日本に住んでいる全ての人間個人に、どれほどの殺意をもっているのか、などの検査をする予定です。要注目人物は、常に警察の目が行きとどく範囲で生活していただきます。」

個人、とは大変だな。何万人いると思つてゐるんだ。何年かかる？老人は、俺の考えている事を悟つた様にとフツと笑い、

「御心配には及びません。試験はこの国に居る全員で行つていただきます。」

全員？どうやってだ？俺が尋ねると、老人は一回咳払いをすると

「・・・ソレは企業秘密です。」

とだけ言った。企業秘密、ねえ……。危ない感じしかしなけど。

「期間は二週間。来週の日曜日から、次の次の日曜です。場所は近くの無人島ですが、衣食住は全てこちらが責任を持って管理させていただきます。

二週間の間、長門様を始めた計10人の方泊まり込みとなります。その方々の行動、考え、全てを記録させていただきます。

荷物は全て向こうにも用意して有りますので、何も持って来なくて結構です。」

泊まり込みで二週間、か……。

「勿論、報酬は有ります。最低、10億円。」

……10億？数字にすると1、000、000、000。……。

「前払いとして、五億円差し上げてもよろしいですが、いかがしましょう。」

「ちょっと待って下さい。」

俺はとりあえず、話をそこで止めた。本能的に危ないと感じる。報酬十億。怪しすぎる。

「質問は三つです。一つ。その実験では何をするんですか？」

その問いに老人はただ

「・・・企業秘密、と答えさせていただきます。」

「・・・二つ。報酬十億というのはいくらなんでも多すぎませんか？」

「・・・その事に関しても企業秘密です。」

しかし、十億というのはあくまで目安でしかありません。其れ以上多くなったり、少なくなったりは貴方様がどれだけ私たちに情報を提供していただいたか、という事で決めさせていただきます。」

「・・・最後です。何故、俺なんですか？」

その問いに、老人は俺の目を見た。その視線に一瞬たじろいてしまう。だって、その視線はあまりにも・・・

冷たかったから。

「・・・長門様を推薦したのは私です。」

意外な言葉が来た。何故、俺？というか、俺の事を知っているのか？

「・・・ご両親を幼いころに亡くされ、その犯人は未だ見つからない・・・。」

ギクリとした。何故、知っている・・・？

「この実験に参加していただけたら、貴方は『真実』を報酬として得る事が出来ます。」

・・・参加しますか？」

頷くしかなかった。

壺（後書き）

やっと始まりました。長い間書かなくてすいません。

式

俺が10歳の時、つまり8年前に俺の両親は死んだ。

正確には殺された、というべきか。

ソレを知ったのは小学校で授業を受けていた時だ。先生が真つ青な顔をして、俺の教室に飛んできた。そして言ったのだ。

「貴方のお父さんとお母さんが殺された。」

と。

原因は、銃による銃殺。二人とも心臓を一発だったらしい。貴重品が無くなっていたことから、家に強盗が入ってきててもみ合っている時に殺された、と警察は判断した。

犯人は未だに見つかっていない。

いや、もしかしたら捜査自体がされていないのかもしれない。

俺は叔母の家へ引き取られた。叔母は無愛想な人だが親類は叔母しかいなかったのだから仕方が無い。

俺は一応、バイトをして生活費は払っている。貰える時にはかなり貰えるし、貰えないときは貰えないと言う不安定な仕事だが、まあ

まあ面白い仕事だ。

と言う訳で、俺の両親は死んだ。

参

老人に渡されたチケットで列車に乗る。

「・・・うわ。」

思わず声をあげてしまうのは仕方がないだろう。

黄色い光に反射して光る金で出来たシャンデリアと、新品と一目で分かる程に綺麗な薄い茶色で出来た机に繊細な鍊金で出来た背凭れせもたに濃い朱あかで出来た座面。一瞬、入る事をたじろいでしまう。

何というか・・・写真に撮っておきたいと思ってしまうのは仕方がない様な・・・多分、この先同じ様な物を見れるのはまず無いな。絶対に。

とか何とか思っている内にガタンという音とともに列車が揺れ、バランスを崩してフラつく。思わず体を支える為に机に手をつく。あ・・・危ねー。ふー、と大きく溜息をつきいったん落ち着こうと息を整える。そしてスグに、机に手をついた事に気がつき手を離す。や・・・やっべえ・・・指紋付いちゃったよなあ・・・よく分からないが、テレビでやっている『ナント力鑑定』は手袋とかはめているよな・・・

そして、思わずついた手をスグに離し手を払う。

やっべえ・・・

『山楼鬼町さんりんきまち』という聞いた事も無い町へ向かう列車。俺の乗った車

両は、俺以外に人が居なかった。まあ、いくら夏休みだからと言っても平日だし、仕方が無いのか・・・と思って列車を探検すると、他の車両は混んではないが、ソコソコ席は埋まっていたのが俺の恐怖を誘った。

列車は走る。

規則的に揺れる列車。

列車は走る。

規則的に揺れる列車。

俺はいつの間にか眠りについた。

窓から差し込む光がまぶしくて手で太陽を隠し目を細める。眩しい・・・。

恐る恐る目を開けると見たのは、一面に広がる青・・・ではなく『空』と『海』だった。

「うわぁ・・・。」

思わず声に出す。綺麗・・・。

「海は初めてか？少年。」

あ、まあ・・・。はい。そうですね。

・・・って、え？誰？俺しかない筈だが・・・。声のした方を見

ると、右隣に背の高い女・・・というか女性が居た。

真黒な長い髪に半そでのＴシャツを着て青いジーンパンを着た、何処にでも居そうな女性が居た。しかしその表情は、途方もなく不満そうな仏頂面の顔。・・・えっと、どちら様？俺が見ていると女はギリリと言う感じで睨んできた。・・・あのー？

「・・・何？」

・・・いや、別に。何でもないけど。「そ。」という声を発してから鼻を一回鳴らした後、視線を逸らした。・・・えっと・・・。

「どちら様ですか？」

四

女は無愛想な顔でぶっきら棒な声で

「中川静香。」

とだけ言い放った。そして、ギロリと言う感じで睨む。・・・別に、睨まなくっても良いだろ。酷いな。全く・・・。

「・・・・。」

・・・会話終了！？俺は、会話を続けようと『あのー』ト力『えつとー』ト力を言うと、女・・・もとい中川・・・さんは俺達の事を鼻で笑い、脇に置いてあつた鞆から分厚い本を取り出して読み始めた。何と言うか・・・・。人がコミュニケーションをとろうとしているのにその態度は何だ。とか文句を言おうとすると

「・・・・。」

無言で睨まれた。睨むなよ。

五

そのまま無視して、無視されるというムカつく態度をとり続けながら、『次は〽山桜鬼駅〽』というアナウンスが聞こると席を立った。席を立つ瞬間、驚いた様な、悲しい様な感じの顔を中川さんは下がほんの一瞬ですぐに視線を本へ戻し分厚い本をパタンと閉めた。俺は何のためらいも無く電車を降りる。潮の香りが鼻を突く。あー、いいな。海って。初めてだけど。ト力思っている

「・・・退いて。邪魔。」

というぶっきら棒な声がして振り返る。すると不満そうな顔で中川さんが立っていた。どうやら彼女も此処で降りるらしい。俺は何も言わずに体を横にずらす。中川さんは鼻を一回鳴らした後スタスタという感じで歩いて行った。俺はその後ろ姿を見ながら大きく溜息をついて、『無人電車站の旅』というテレビ番組が有ったら特集されそうな駅の改札口へと向かった。確か、待ち合わせ場所は改札口を出た所だったはずだ。

改札口に向かって歩くと、・・・いや正直に言えば、ベルトが今にも壊れそうな腹の駅員さんが眠そうに肘をつきながら座っている所へ向かった。どうやら、改札口らしい改札口は無いらしい。駅員さんに切符を渡し、立ち止まる。

一面に広がる、海と青空。都会、東京の空よりも高く、澄み渡っていた。毎日見ている空でも、場所によって違うもんなんだな。

ト力思っていた時。

「和人 凜様でいらつしゃいますね？」

真黒なスーツを身につけて、真黒なサングラスをかけた若い男の人が声を掛けてきた。田舎くさい景色に不似合いな人だな……。恐る恐る頷くと、深々という感じで頭を下げてきた。思わず一礼する。

「本日は、警察署特別審査の実験にご参加いただきました誠にありがとうございます。」

「あ……。は……。い……。？こちら……。こそ……。」

途方もなく綺麗な敬語におっかなびっくりしながら、思わず一礼してしまう。何で、こんなに緊張してんだ、俺は。

「あのさ、私もんなケド。それに参加すんの。」

嫌な予感がしたが、後ろから声がしたので振り返る。……。予想的中。中川さんが睨む様な目つきで見ていた。男は、大変失礼しました。と言って、

「では会場へご案内いたします。」

とだけ言って高級そうな車に案内されて後部席へ座る。二分程走ったところで、俺は疑問を口にしてみた。

「あの……。コレってタダ……。じゃなくて無料なのですよね……。？」

後で、列車代やら食事代とか要求されたら本気で困る。これこそ10億を超えるかもしれないからな。運転席で運転を担当していた男

の人は、一瞬鼻で笑う様な音の後に

「勿論でございます。」

とだけ答えた。そして、

「それほど価値のある実験にご参加して頂くので。」

・・・はあ。

「その、実験って何？」

中川さんが、ぶつきら棒に言う。俺の隣に座っている中川さんは、足を組み腕を組むという姿勢で弧の言動……。この状況でも変わらないその口調と態度は尊敬します。男は答えにくそうな沈黙の後

「・・・会場にてご説明いたします。」

「それってさ、犯罪に関わるとかないよね。」

「・・・会場にてご説明いたします。」

「何で、私やコイツが選ばれた訳。」

「会場にてご説明いたします。」

「全部それかよ。」

「・・・大変申し訳ございません。」

中川さんは不満そうに鼻を一回鳴らして顔をそむけた。・・・何と
言うか・・・変な会話だな。

船の内装は、馬鹿みたいに綺麗だった。・・・金の掛け方が半端ないよな・・・。

何故か緊張しながら船に乗り込む。

あー。ちゃんとした服、着てくるんだった。何で、Ｔシャツとジーパン着てきちゃったんだろう。今更ながら後悔する。中川さんも同じような格好をしているが、全く動揺した様子や後悔した様子は無い。何処まで図太い神経の持ち主なんだよ。

ホールの様な所に案内された。

他にも参加者は居た。俺を含めて十人程だろうか。各々が椅子に座ったり、本を読んだり、お喋りをしたりして楽しんでいる。一番若いのは、俺か・・・。俺は、一番安そうな椅子を選んで座る。中川さんはというと、一番手前に有った、高級そうな椅子に座る。・・・尊敬するっす、中川さん。

そう感じてスグだった。プツンと言う音がしたのは。何か・・・マイクの電源を入れた時の様な音。

『皆様。今回は、実験にご参加して頂き、誠にありがとうございました。』

男の人の声がした。だが、何処ぞなく都市が掴めない。低く、落ちていた声だが、何処か幼さが有る様な声。老人と言われればそんな気もするし、子供と言えばそんな気もする。

「ちょっと聞きたいんだけど。」

その声を上げたのは中川さんだった。その声にマイクの声は冷静に

『質問は後で受け取ります。』

とだけ言う。中川さんは不満そうな顔を作ったが、舌打ちを一回して黙った。それを見た様にマイクの声は続ける。

『皆様に受けて頂く実験は、心理犯罪学に基づく実験です。その為、実験内で行われた事の責任は全て私どもが引き受けます。』

皆様にしていただくのは、簡単な事です。

とある、島で生活をして下さい。

皆さんのとって頂ける行動によって報酬は増える時があります。その説明は、中でさせて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4973w/>

凍結 0

2011年11月29日21時52分発行